

書評と紹介

性的判断を行い自己決定権を行使する自律主体に焦点をあててきた従来のバイオエシックスの限界を踏まえ、それを越えた論点を示そうとする問題意識を共有していることによるだろう。小松が述べている本書の構想にもどると、①②③の大きな枠組みの設定も成功したと思われる。

とはいえ、まだ諸宗教を横断して重要な論点を列挙するといふような段階にまでは至っていないようだ。①と②をつきあわせて③に至ることができればたいしたものだが、なかなかそうはいかない。キリスト教の場合(第二、八章)はこうした手順の先例が多々あるのだが、他宗教の場合には、①の方に力点がかたよって②が薄くなっている場合(第三、五章)、逆に②の方に力点が置かれて①が薄くなっている場合(第四、六章)に分かれているように感じられた。仏教に関わる第一、第七章が比較的バランスがとれているのは、現代日本文化に近い世界なのでさほどの説明を要しないという理由によるのかもしれないし、仏教に即した生命倫理の考察がそれなりの蓄積をもつに至っていることによるのかもしれない。

というわけで、本書を通読すると人類文化の多様性に圧倒されるような思いも残る。だが、さらに各宗教の中の多様な立場や解釈潮流のことなども考慮に入れる必要がある。考察すべき生命倫理問題(②)をしぼって、諸宗教からの考察を比べるような試みも今後は必要になるだろう。課題は多いが、このような試みを求める声はますます高まってくるだろう。新海域への船出を知らせる明るい汽笛をのせた好著の刊行を心から言祝ぎたい。

杉山幸子著

『新宗教とアイデンティティ』

——回心と癒しの宗教社会心理学——

新曜社 二〇〇四年二月五日刊

A5判 viii+二二二頁 三五〇〇円+税

古澤 有峰

今回、杉山幸子著『新宗教とアイデンティティ——回心と癒しの宗教社会心理学』を拝読した時に私が感じた事は、おそらく山登りや森の散策の最中に、思わず向こうの道からやって来た旅人と偶然に出会った、その様な心境に似たものであるう。

私は現在、宗教学科の博士課程で博論を執筆中であるが、修士課程までは医療(文化)人類学と臨床心理学を学んだという学問的な背景がある。また杉山さんとは一度、東京大学の教育学部で行われた、宗教心理関係の研究会でお会いさせて頂いた。日本ではまだそれほど研究層の厚くないこの分野の、新たな学会や研究会を作ろうという関係者の熱意を、そこで強く感じたものであった。その時に頂いた抜き刷りが、今回書評を担当させて頂く本書と深い関わりのある論文であったことは、今思えば大変意味深く思われる。

本書は、著者が東北大学に提出した博士論文「新宗教の社会心理学的研究——回心・社会化・生涯発達」(二〇〇二年)がもととなっている。あとがきでの著者によれば、論文から本の

形式にするにあたつて一部を削除、構成を変更すると共に、全体に加筆修正を行ったとある。本書は8章から成り立っており、第1、2、6章は書き下ろし、第3章は『心理学評論』、第4、5章は『日本文化研究所研究報告』、第7章は『東北大学学生相談所紀要』と『社会心理学研究』、そして第8章は『宗教研究』が初出である。また博論で議論を試みた「宗教の定義」を、本書には含めなかったとある事は、筆者には大変興味深い点であつた。これについては改めて後述する事とする。

第1章は「心理学と宗教」という題目で、二つの宗教心理学、および宗教への心理学的アプローチという節から成り立っている。二つの宗教心理学とは、ここでは心理学者の宗教心理学と、宗教学者の宗教心理学の事を指す。このような二つのアプローチの間には様々な違いが存在し、また特に言える事は、それぞれの基本的な研究関心の違いからくる、両者の交流の不活発さである。それに加えて著者は、そもそも宗教心理学そのものが、どちらの分野でも盛況とは言えない状態にあり、社会心理学や生理心理学における宗教を対象にした研究も、それぞれの研究成果が「宗教心理学」の名のもとに積み上げられる事がないと指摘している。

このように、宗教学者の手による宗教心理学のまとまった著作は、最近はまったく出ておらず、宗教研究の他領域と比べて極めて少ないという実情を踏まえた上で、著者はさらに宗教心理学における欧米からの強い影響についても指摘している。宗教心理学は当初からアメリカを中心に、ユダヤ・キリスト教、特にプロテスタント宗派を主な対象として発展して来たという

歴史がある。しかし日本を初めとする、宗教的背景の違う文化圏の状況については考慮されてきていない。

このような対象の問題は、宗教心理学への欧米以外の文化圏からの貢献がまだ少ないという事実を反映したものである。このような欧米以外の場所においてこそ、文化の文脈を重視した視点に立った研究を行う事が重要であり、日本を初めとする各地域からの研究の発信を通じて、研究の対象の見える研究が広がって行く事が、宗教心理学をより豊かなものにしていくのではないか。著者の主張する議論の中核をなす点の一つがここにある。

第2章ではこのような問題意識を踏まえ、宗教心理学の特に西洋における歴史が記されている。欧米の宗教心理学の歴史を概観する事によって、日本の宗教心理学、宗教社会心理学の今後について考察を加えたいという著者の意図がそこにはある。著者は宗教心理学を近代の産物と捉え、その理由を宗教に対する客観的態度が可能になる時代背景に求めている。また比較宗教という研究関心の芽生えが諸宗教に共通の基盤を与え、これをもって宗教心理学の本格的な幕開けへの序曲と見なす事が出来るとしている。

宗教心理学は一九世紀後半に成立するが、それから現在に至る歴史を、著者は三つの時期に分けて捉えている。第一期は一九世紀の終わりから一九三〇年頃まで、第二期はそれから一九五〇年代まで、第三期は一九六〇年頃から現在までである。第一期は古典的宗教心理学と呼ばれ、ジェイムズとスターバックスを含む四人が代表的な研究者としてあげられる。心理学その

書評と紹介

ものの創成期にあつて、宗教心理学がまだメインのテーマになり得た時代でもあつた。これについて著者は様々な研究者の論考を、「科学としての心理学」と「宗教との関係」という二点にまとめている。

当時の心理学は哲学から独立を果たしたばかりで、自らを科学として確立する事に懸命であつた。しかしそれは長続きせず、ここには宗教との関係が大きな影響を与えており、心理学が宗教に手を伸ばした事を脅威と感じた宗教の側が、それに対して「乗っ取り」という対抗手段に出たというのが著者の見方である。例えば、前述の四人に続いて宗教心理学に参加したプラット、コー、エイムズが神学者であることを指摘し、結果として彼等が宗教心理学に護教的・神秘的な傾向を持ち込み、科学としての宗教心理学の権威を失墜させる事になったとしている。

宗教心理学の本格的な復興は一九六〇年代以降とされることが多く、それに向けての準備は五〇年代から始まっていたという。フロムやエリクソンの著作もこの年代に出版されており、精神分析学の観点からの宗教研究が花開いた。また一九三〇年以降の宗教心理学の冬の時代においても、宗教的態度や宗教と偏見に付いての研究を行っていたオールポートは、一九五〇年に『個人と宗教』を発表した。以上を踏まえて著者は、宗教心理学は社会心理学や人格心理学の研究の中に、姿を換えて生き延びていたのだとしている。

理論や研究方法についても著者は本章で述べているが、主に経験的アプローチによる研究が中心である。宗教心理学の大き

な弱点は理論にあり、それは宗教心理学と心理学とのつながりが十分に確立していない事を意味するという。方法に関するポイントの一つとして実験が上げられるが、宗教心理学において現在の心理学の主流である実験法による研究が行われる事は極めて少なく、これが宗教心理学を心理学の主流から孤立させる一因となった。いずれにしてもこの領域には焦点と境界が欠ける傾向があり、それが心理学の主流に受け入れられない原因の一つと考えられるというのが著者の意見である。

第3章では、以上の議論を踏まえた上で、日本における宗教心理学の歴史についての検討がなされている。まず日本における近現代の宗教事情の検討に始まり、明治・大正期、昭和初期、戦後から現在までを総括した上で、再び方法論についての検討を結びとして行っている。多くの学問と同様に、海外からの輸入によってスタートした日本の心理学は、ヴントによる心理学実験室の設立という世界的出来事にそれほど遅れる事なく始まったとされる。

その一方で宗教心理学についてはどうか。著者は、日本では宗教心理学は心理学の下位分野として広く認められているとは言えないとしている。宗教を研究対象とした社会心理学や教育心理学はあつても、それは宗教心理学とは認知されないのが一般的である。明治以降、宗教心理学に積極的な関心を抱いた心理学者は確かに存在したのであり、著者はここでそうした人々による研究の系譜を辿る事によって、現在の心理学、社会心理学における宗教研究の可能性を探ろうと試みている。

また宗教学的宗教心理学の変遷についても検討がなされると

共に、戦後の心理学者による宗教研究、宗教の社会心理学的研究の本格的な始動となった宗教的態度に関する研究、また新宗教へのアプローチとして重要な手法の一つである回心研究についての記述がなされている。他にもパーソナリティ心理学の宗教研究への寄与や、禅や瞑想、シャーマニズム研究に関する心理学的研究等、著者は自らの社会心理学的背景を十二分に生かし、宗教研究に関する幅広い先行研究とその歴史を、丹念な作業で洗い出していく。

ここで方法論として著者が提示しているのは、二つの方向性である。一つはある研究領域の中で、宗教研究が実りの多いテーマとしての可能性を示す事であり、もう一つは宗教という現象に強い関心をもってこそ生まれる、独自の宗教心理学的研究を目指す事である。特に後者においては対象に深く接近したフィールドワークが不可欠であり、これが本書の後半に報告される、著者のフィールドワークの必然性と強く関わりを持つてくる。

第4章において著者は、心理学、社会心理学の立場から宗教に接近する場合、真っ先に会おう概念の一つとしての「回心」を中心に、論を展開している。特に、新宗教に関心を持つ人にとっては、これが非常に重要な概念の一つである事は疑う余地はないと言えよう。それと同時に、例えば一世紀近い研究史の中で様々な成果が生まれたにもかかわらず、それが未だに整理されていないまま林立する現状が述べられ、この「回心」という概念が如何に捉えにくいかという事もここでは指摘されている。ここでは現在の日本の宗教事情において、社会心理学の立

場から回心に対してどのようなアプローチを取りうるかを探ろうという試みがなされている。

初期宗教心理学における成果は、それぞれ歴史的な文脈において捕らえる必要があるとし、著者は一九世紀から二〇世紀への移行期に、アメリカで起こった信仰復興運動(リバイバル)という社会現象によって、宗教心理学が促進され、また回心がそこでの主要テーマになったのも、リバイバルが回心を重視していたからであろうとしている。また科学としての宗教心理学の権威の失墜、大恐慌の影響でリバイバルが停滞し、回心そのものが減少した事により、初期宗教心理学が急速に衰退した後、回心研究が復活したのは一九六〇年代以降である。これは当時の社会の宗教的状況と無関係ではなく、回心という用語の意味する現象自体の変化を伴いながら、新宗教運動研究の一部として復活した。そこでは回心の心理学的要因だけでなく、社会的要因が検討されるようになり、二つの異なったパラダイム(受動、能動)を背景に発展し、日本の回心研究にも影響を与えた。著者は日本の回心研究の歴史的推移についても簡潔にまとめ検討を行っている。

第5章で著者は、宗教と癒しをテーマに、宗教と医学、また伝統的な宗教における癒し、新宗教における癒しについて検討し、最後に癒しとアイデンティティの問題について言及している。新宗教の三大入信動機といわれる「貧・病・争」をあげながら著者は、そのような問題からの救いを求める人々が、必ずしも問題の直接的解決を得ている訳ではない点を指摘し、ここで考えられるのが「癒し」の問題であるとしている。この章で

書評と紹介

著者は、病氣治しという、従来は否定的に捉えられる事の多かった問題も含め、宗教による癒しに関するこれまでの知見を、可能な限り歴史的な変遷に注目しながら概観する事を目標としている。それを通じて著者は、宗教、特に新宗教における癒しの性質について考察を試みている。

宗教と医学の関係は深く、科学的医学が始まる古代ギリシャ以前から人間の医学的営みは行われて来ていた。近代西洋医学が誕生する際に、近代社会における宗教と医学の分離は決定的となったが、民間レベルでの病氣治療は世界のあらゆる地域で残っている。著者はこのような歴史を指摘しながら、新宗教における「病氣治し」について言及している。新宗教やシャーマニズムが現世利益を扱う限り、もっとも切実な悩みの一つである「病い」に対応するのは必然的な事で、ここで現在の医療を担う西洋医学との軋轢が生じる訳であるが、このような宗教的・シャーマニズム的医療の持つ側面を肯定的に見る流れについて著者は言及し、その面への医療人類学の貢献についても述べている。筆者はこの分野が専門であるので、ここではもう少し突っ込んだ議論が欲しかったのが正直な感想であるが、全体のバランスから考えれば致し方のないところでもあったかもしれない。

続けて著者は、伝統的な宗教における癒しの歴史的推移について、キリスト教の歴史とその文脈をもとに、仏教における癒しの歴史と状況を検証し記述している。また新宗教の精神医学的研究を紹介、新宗教における癒しの性質とその類型論についても検討を行っている。また本章の最後では、癒しの変容をテ

ーマに、一部の新新宗教における、宗教と心理療法の融合について記述している。このような宗教運動は一九世紀中頃のアメリカにおいても見られ、日本でも従来からそのような傾向を持つ教団が存在したが、その傾向を押し進めた教団の出現によって、宗教と癒しにあらたな側面が提供されるのと同じに、宗教と世俗的な心理療法活動との差がますます見えにくくなり、アイデンティティの問題が生じてくるのではと著者は指摘、またそのような新宗教と心理セミナー等の関係についても検討している。

第6章では、著者自身が調査協力を得て資料を収集した、「崇教真光」教団でのフィールドワークが紹介されている。そこで著者は、人々がどのような営みを繰り返しているのかを記述している。真光の歴史や世界観、またお浄めや手かざしといわれる真光の業についても具体的な紹介を行っている。お浄めの場についての記述、道場という場におけるコミュニケーションに著者は注目し、そこでどのようなアイデンティティ構築の試みがなされているのかを検討、それを人々の信仰の場であり、またアイデンティティの構築の場であると位置付けている。

そこで行われる清浄化のプロセスの記述は大変興味深く、著者が行ったフィールドワークの成果が現れていると言えよう。そして筆者は自らの研究の文脈からは、真光を信仰する人々の病氣観についての記述が大変興味深かった。現代医療とは相容れない部分が多く、特に薬漬けの治療に対しては批判的であるが、それと同時に、一般にイメージされる程に現代医療を完全

否定している訳ではなく、著者が調査を始めた十数年前に比べて、現代医療との共存を図るべく模索がなされているという。この様な流れを筆者は、自らの研究の中では医療化の文脈で捉えている。医療化とは一般に、医療が本来中心的な関わりを持つていなかった分野にまで、医療および医療的な解釈や事象が進出する事を指すのだが、これについてはまた別稿において論述したい。

第7章では、著者はここまでの研究を踏まえた上で、調査データをを用いて新宗教における回心について検討している。回心と宗教的社会的化、生涯発達をテーマに、宗教的社会的化とアイデンティティの問題を検討している。ここで宗教的生涯発達という観点を導入するのは、諸処の理由からエリクソンの理論に準拠するからであるとして、著者はライフサイクルにおける宗教性的変化と、特定の集団における宗教的社会的化を包括的に捉える事を試みている。入信状況等を具体的な事例による検討と共に検証しているところは、本書のもっとも重要な部分の一つであると言えよう。

このような具体的な事例検討を経て著者は、宗教性の多元性についての記述へとつなげていく。宗教的社会的化には信念、儀式（宗教活動）、共同体といった複数の側面があり、それらの進み方が一様ではない事を指摘、宗教性は多元的構造を有するが、それぞれの次元がまったく独立している訳ではなく、相互に影響を与えていると述べている。また真光における一世と二世の組み手の、宗教的発達の道筋が異なる事に着目し、次元間の構造が異なるのではないかとしている。続く宗教的社会的化と

発達という項目では、このような問題意識を元に、質問紙調査の結果を用いて、入信後の宗教的社会的化とライフサイクルにおける宗教的発達について統計的に検討している。

最後の第8章において著者は、日本人の宗教性についての検討を行っている。また自身の調査研究の中から、日本におけるモルモン教およびモルモン教への入信についての記述が行われる。宗教を信じるというあり方そのものが、いわば外から来たもの、すなわちキリスト教に由来するものではないか、またこれは日本人の無宗教さというよりも、キリスト教圏と日本との宗教観そのものの違いを表しているのではないかと著者は指摘している。また外来の宗教が入って来た際に、世代を経るごとに信者の民俗宗教性が濃くなっていくとすると、民俗宗教が信仰のあり方にどのように影響を及ぼすであろうか。このような視点から著者はモルモン教を取り上げ、信者の宗教性におけるモルモン教と民俗宗教のダイナミクス、かれらの宗教的アイデンティティのあり方を検討している。

以上、本書の概観を眺めながら、筆者の感想を述べて来た。著者は自らの論旨に従い、特に第6章および第7章において、日本の宗教心理学研究における量的研究の層の薄さと質的研究の重要性を指摘、質と量の双方を満たす研究スタイルを追求している。第7章の最後では、質問紙が共同体の次元に関する心理的な機微を十分に汲み取れなかったという可能性も考慮し、これを今後の課題としながらも、積極的に質量双方の研究を取り入れる事に取り組んでいる。このような研究が、著者が最初に述べたような、欧米またはキリスト教圏以外からの宗教心理

書評と紹介

学研究の蓄積へとつながっていくのであり、評価されるべき点であろう。著者が記した様に、関連他分野との協力関係を築く為にも、今後ともこのような手法の精査と発展は必要不可欠である。

その上で筆者が敢えて述べたい点は、筆者自身の研究経緯と深い関係がある。社会科学系の分野を研究して来た筆者は、量・質双方の研究法を学んだ経緯がある。量的研究でどうしても汲み取れない部分について、更に研究を進める為に質的研究が重視される分野に移り、そこからさらに宗教研究に移って来たのであるが、それは量的研究を徹底する重要性を認めながらも、その上で描写し切れない部分が、実はむしろ宗教研究の核心をなすのではないかと考えたからであった。従って宗教心理学への社会心理学の貢献を認めながらも、その手法にはおのずから限界があり、それが宗教心理学研究の蓄積が少ない根本的な原因ではないのかと考える部分がある。これは本書および著者の功績を減ずるものではなく、むしろ研究スタンスの違いから来る意見ではあるが、おそらく同時に宗教心理学という学問分野の根幹に関わる問題であろう。

これに関連したもう一つの大きな疑問は、前述したように「宗教の定義」の中に含まれている。博論で行った「宗教の定義」に関する議論が本書では除外されているが、これはなぜであろうか。また著者はあとがきの中で、調査中に多くの信者の方達と接し話を聞いていく時に、一番共感できたのが「死」の問題であったとしている。また逆に言えば、この部分で共感出来るからこそ調査を続けることが出来たと述べている。その上

で、この問題については今後の課題とするとし、本書には掲載していない。

紙面の関係での限界、また恐らく全体のコンセプトとして、社会心理学的アプローチを主軸としたという事情があったのではと推測されるのであるが、それでも本来は宗教の定義、および宗教的事象の起源の一つであるとされる死の問題を、本書のタイトルから考えても、その内容から除外するべきではなかったのではないか。これが筆者の率直な感想である。死生の問題は宗教の定義の内容と表裏一体であり、量的研究のスタンスではどうしても汲み取り切れないものの一つでもある。これについての著者の御意見を、今後の著書の中では是非伺いたいと考えている。冒頭で述べた山登りや森の散策の比喻と同様に、この様なさらなる対話を喚起する研究に出会えるのは、研究者としてこの上もない喜びであると言えるだろう。今後も著者の研究を、熱い視線と共に注視していきたいと感じる次第である。